

東濃地方の芝居等文化資源記録プロジェクト

地芝居をはじめとする伝統芸能継承の試みと持続可能な観光への可能性について



永田典子 NAGATA, Noriko

中部大学人文学部日本語日本文化学科教授

愛知県出身。甲南女子大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。修士（文学）。専門分野は説話文学、民俗学。研究テーマは、伝承文芸の文化的位相。主な著書に『愛知県史 別編民俗 1』（共著、愛知県、2011 年）、『尾張伝説考』（中部大学、2021 年）、論文に「犬頭系説話に関する一考察」（『人文学部研究論集第 32 号』、2014 年）などがある。



嘉原優子 YOSHIHARA, Yuko

中部大学人文学部日本語日本文化学科教授

兵庫県出身。関西大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門分野は宗教学、民俗学、文化人類学。研究テーマは、日本を含むアジアの宗教儀礼や奉納芸能、神観念について。主な著書に『バリ島の村落祭祀と神観念』（おうふう、2010 年）、論文に「バリ島の仮面—ランダの行方—」（『アリーナ第 22 号』、2019 年）、「バリ島の長老集団の役割と構成について」（『アリーナ第 23 号』、2020 年）などがある。

ABSTRACT

In FY2022, we researched focusing on the activities in the Tokai region by Ichō Nakamura, a Ji-kabuki-turned-Okabuki actor from Ena City, and the activities of Danjō Matumoto, a Ji-kabuki choreographer. A noteworthy event this fiscal year is the touring performance at five local Kabuki theaters in the Tono region by six Nakamura disciples, including Ichō Nakamura. This performance was made possible through crowdfunding. This shows that there are a considerable number of latent and core fans who want to support local Kabuki theaters. In the Tono region, the birth rate is declining, and the population is aging, and there is concern about the successor problem of Ji-kabuki. In order to entrust the future of Ji-kabuki to the children who will lead the next generation, cooperation between the local preservation society and the elementary school is absolutely necessary. Maintaining and developing local culture will also revitalize the area. In the future, we should also consider focusing on inbound tourism that actively utilizes local theater.

1. 2022 年度の活動について

2022 年度は、岐阜県恵那市出身の大歌舞伎俳優・中村いてう丈の東海地方での活動と、氏の叔母であり、東濃歌舞伎を世に知らしめた故 6 代目松本団升氏の次女である松本団女師の活動についての調査を中心に報告する。

2022 年度の東濃の地芝居に関する大きな動きは、現存する 5 つの芝居小屋での中村屋門弟による大歌舞伎公演であろう。これには、同地方はじめ日本各地の芝居小屋での歌舞伎公演実現に努めた故十八代目中村勘三郎丈やそれを受け継いだ勘九郎丈、七之助丈の活動の影響や恵那市出身の大歌舞伎俳優・中村いてう丈の存在が大きかったと思われる。いてう丈は、2020 年、恵那市観光大使就任以降、地芝居の普及や理解の促進につながる活動を精力的に行なっている。

一方、いてう丈の叔母である松本団女師は、20 年以上、東濃の 10 の歌舞伎保存会で振付師として指導に当たっている。2022 年度もコロナ禍の影響を受けつつも、それぞれの保存会の公演に合わせて演目を選定し振付指導を行っている。2023 年 2 月 10 日中部大学で開催された「持続可能な観光 2022」シンポジウムでは「東濃地方に伝承された地芝居と振付師の活動について」と題する講演を行なった。団女師の講演内容については本報告書に記載されているので、それを参照されたい。役者歴 60 年を超える団女師のもとには、東濃地域の地芝居に関する貴重な写真、

録音、録画等が保管されており、また、振付師、顔師、床山はじめ、歌舞伎上演を支える多くの領域で、故2代目松本団升氏の子孫による継承が行われているとのことであった。

2. 「鶴の子」会による五座巡業について

五座巡業は、中村屋のかつての家紋に鶴が描かれていたことに由来するという「鶴の子会」メンバーによって行われた。その日程と芝居小屋は以下の通りである。

2022年6月8日 かしも明治座

2022年6月9日 宮盛座

2022年6月10日 五毛座

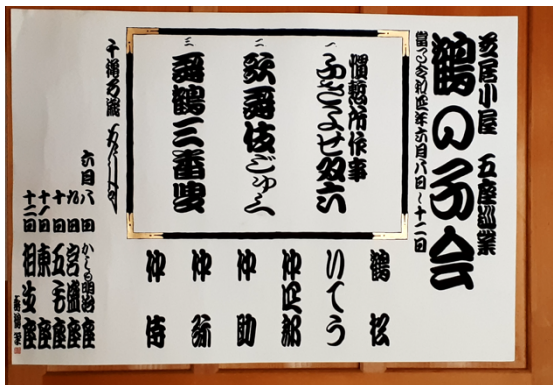
2022年6月11日 東座

2022年6月12日 相生座

演目は五座共通で、『慣懸所作事（みなろうてはじのしょさごと）ふきよせ双六』『歌舞伎じゅく』『舞鶴三番叟（ぶかくさんばそう）』で、演者は、いてう丈に加えて、中村鶴松丈、中村仲四郎丈、中村仲助丈、中村仲弥丈、中村仲侍丈の6名である。本巡業は、

キャンプファイヤーというクラウドファンディング (<https://camp-fire.jp/projects/view/581085>) を介して実現した。「鶴の子会—芝居小屋五座巡業—」「～古き良き芝居小屋にエールを！！中村屋の門弟が歌舞伎で地域活性化～」と銘打たれたこのプロジェクトは、2022年05月12日に募集を開始し、2022年6月30日までの50日間で、309人から3,515,136円の資金を集めた。期間中は、キャンプファイヤーのサイトのみならず、Twitter、YouTube、Instagramなども利用して広報活動が行われた。観覧券代は一律3,500円であった。

我々のプロジェクトが実現できたのは、6月10日の五毛座における公演である。開演は14時であるが、1時間ほど前から次第に観客が集まり始め、1階席（自由席）はほぼ満席となった。また、2階席には地元の小学生が招かれ、興味津々の面持ちで会場を見回したり、幼いながらも歌舞伎についての知識を披露しあったりしており、この地に歌舞伎が根付いていることをうかがわせる光景であった。



当劇場内の演目・演者の表示



五毛座1階客席の様子



五毛座2階客席の小学生

『ふきよせ双六』は、「京鹿子娘道成寺」「吉原雀」「供奴」「近江お兼」「喜撰」「船弁慶」「棒しばり」「越後獅子」、そして再び「京鹿子娘道成寺」と、それぞれの演目の一部を繋いだ

舞踊で、「果てのない芸道を切り拓く」という意味を込めたものであった。『歌舞伎じゅく』は、舞台上で役者を後見する際の注意事項や、歌舞伎公演時の楽屋での門弟たちの仕事をユーモアを交えて紹介するもので、2 階席の小学生たちにはもちろんのこと、1 階席の観客たちも大いに楽しんだようである。『舞鶴三番叟』は、演者総出による 3 人の三番叟と 3 人の千歳が同時に一つの舞台にのるという華やかで「洒落」た三番叟となった。

カーテンコールでは、鬘を脱いでしまった女方が再度舞台上に登場するというシーンもあったが、五毛座での大歌舞伎公演は昭和 26（1951）年以降初めてとのことが飯地町歌舞伎保存会関係者から明かされ、人々がどよめくシーンも見られた。そのような希少な体験ができたことに観客は満足そうな様子であった。

キャンプファイヤーのサイトによれば、「鶴の子」会のクラウドファンディングによる歌舞伎巡業の試みは今後も継続するとのことである。

中村いてう丈は、上記五座巡業以外にも 5 月 8 日に豊田市歌舞伎伝承館会館 5 周年記念事業として企画された「中村いてう講演会～地芝居から大歌舞伎への道～」と題した講演会に登壇、5 月 29 日に恵那市伝統芸能特別企画・中村いてう後援会設立記念の歌舞伎舞踊公演を恵那文化センター大ホールで実施し、自身の経験を通じて地芝居や大歌舞伎について語り、伝えた。

3. 2022 年度プロジェクト総括

地元に所縁のある大歌舞伎俳優の活動は地芝居の伝承と価値を当該地域に再確認させることに大きな影響力を持ち、またクラウドファンディングという方法はコアなファンの「芝居小屋を応援したい」という気持ちをすくい上げ、地元の活性化を図る新たな方法であった。今年度にとどまらず、地年次以降も継続できるか否かが重要なポイントであると思われる。

今後の東濃地方における地芝居伝承の有効な方法として考えられるのは、クラウドファンディングのような潜在的な地芝居ファンを取り込む方法を検討すること、各種 SNS を最大限に利用したイベント周知の方法を検討すること、2027 年度に予定されているリニア新幹線開通後を見据えた周辺地域で進行中の地域開発に伴う観光化の未来図予測しつつ、その中で地域の伝統芸能をいかに展開させていくかを検討することである。

4. プロジェクト総括

地芝居は東濃地方にとって重要な観光資源であり、文化資源となっている。これを持続可能とするには、地元住民の伝統文化に対する理解と、地域文化の健全な継承が前提となる。このような観点から、本プロジェクトは、恵那市飯地町における五毛座歌舞伎保存会の活動を中心に、東濃地方の地芝居の現状を調査し、地芝居を準備段階から記録保存することによって地域文化の維持に貢献することを目的とし、2019 年度より始まった。

主たる調査地である飯地町は、豊かな里山に囲まれた地域で、古くは農業を中心に、林業、養蚕が大切な収入源だったが、現在では企業誘致が進み、企業勤めが一般的となった。若者は進学等で町を出て、都市部で就職することが多く、近年、少子高齢化が進んでいる。また、人口減少も急速に進んでおり、調査を始めた 2019 年 8 月の人口は 628 人であったが、2023 年 2 月時点では 567 人となっている。住民からは限界集落になることを心配する声も聞かれるが、恵那市の移住定住推進事業によって飯地町への移住者が増え、世帯数では 2015 年が 237 であったのに対し、2023 年は 251 となっており、14 世帯増えている。

飯地町における地芝居の歴史は古く、天保年間（1831—1845 年）にまで遡り、現在は飯地五毛座歌舞伎保存会が、2010 年に登録有形文化財に指定された五毛座を拠点として活動している。伝統的な地域文化は、一般的に新たな住民には近寄りがたい面があるが、保存会には地芝居を地域でもりたてていこうとする気運が高く、移住してきた女性も舞台上で演技を披露している。

2019 年度の活動としては、五毛座での上演に接する機会がなかったため、飯地町ふるさと民俗資料館を見学し、地芝居に関する資料等の存在を確認した。館内にはさまざまな民俗資料とともに、歌舞伎台本や芝居弁当用の弁当箱セットが展示されており、いかに芝居が人々の日常の中に入り込んでいたか、観劇が地域ぐるみの娯楽であったかを知ることができた。

2020 年度は、飯地町ふるさと民俗資料館に収蔵されている映像資料、文献資料を中心に整理を行った。録画テープに記録された映像はデジタル化して DVD に保存し、飯地町ふるさと民俗資料館と中部大学国際人間学研究所で共有した。また、地芝居関連の文献資料を調査し、名題・作成者・作成年月日・書き込み・状態等に関する資料を作成した。地域社会では青年団が祭礼に関わることがよくあるため、飯地青年団と地芝居との関係について、第 2 次世界大戦中に発行された青年団雑誌『郷土』も調べてみた。地芝居に関する記録はなかったが、昭和初期以前の飯地では祭礼時に芸能が盛んに行われていたことを示す一文を見つけることができた。

2021 年度は、「清流の国ぎふ地芝居勢揃い公演」（岐阜県・公益財団法人岐阜県教育文化財団主催）に出演する飯地五毛座歌舞伎保存会の稽古を取材した。稽古をつける松本団女師の指導により、演技が素人の域を超え、格段によくなっていくのを目の当たりにし、松本団女師の存在意義と保存会面々の熱意を実感することができた。本番は、5 月 30 日にぎふ清流プラザで上演されたが、コロナ禍により無観客開催であったため、YouTube でライブ配信され、それを視聴した。その翌月には、中村いてう丈による宮盛座（恵那市三郷町）での歌舞伎講座を取材した。更に、10 月には三郷小学校歌舞伎クラブのメンバーへの中村いてう丈による指導を取材した。練習後の児童たちにインタビューすると、歌舞伎に対する意欲ある発言が多かった。歌舞伎体験講座と三郷小学校歌舞伎クラブでの中村いてう丈の指導は、地芝居の身近さと大歌舞伎の華やかさを感じさせ、多くの地芝居保存会を擁する恵那市の人々にとって大きな魅力となったようである。この年度は、録画テープに記録された映像のデジタル化を続行、肥田敏雄氏（飯地五毛座歌舞伎保存会会長）および松本団女師匠所蔵の地芝居に関する VHS テープのデジタル化し、また、山口鉦一氏（飯地ふるさと民俗資料館館長）を介して町民に配布した「過去の地芝居映像募集」のチラシにより新たに集まった映像・画像資料のデジタル化を行った。

2022 年度前の主な活動は以上のとおりである。本プロジェクトは「持続可能な観光」のテーマのもとに東濃地方の地芝居を取り上げたが、飯地町に限らず、東濃地方は少子高齢化が進み、地芝居の後継者問題が懸念されている。地域文化の健全な継承のためには、大歌舞伎俳優たちによる舞台を地元の芝居小屋で観覧した飯地小学校の児童たちや、地元出身の中村いてう丈に演技指導をしてもらった三郷小学校の児童たちのように、まず子どもたちに関心をもたせることが大切である。幸いなことに、この地方に所縁のある中村いてう丈や、松本団女師とその親族の方々がいらっしゃる。次世代を担う子どもたちに地芝居の将来を託すには、地元の保存会と小学校との協働が是非とも必要である。

地域文化を維持、発展させることは、地域の活性化ともなる。コロナ禍が終息し、地芝居を鑑賞するためのバスツアーが再開されることを願うが、今後は地芝居を積極的に活用したインバウンド観光にも力を注ぐことも考えるべきであろう。